

唐津市文化財調査報告書 第172集

谷口石切丁場跡

—重要遺跡確認調査概要報告書—

2015. 3

唐津市教育委員会

唐津市文化財調査報告書 第172集

谷口石切丁場跡

－重要遺跡確認調査概要報告書－

2015. 3

唐津市教育委員会

序 文

佐賀県の北西部に位置する唐津市は、玄界灘を挟み朝鮮半島に面しているという立地条件から、古くから大陸との交流が盛んに行なわれ、大陸文化の受容口として、非常に重要な役割を担ってきました。このことは、唐津市に所在する遺跡、あるいはそこから出土した遺物から窺い知ることができます。

しかし、その一方で、現在開発行為等によって多くの遺跡が消滅の危機に瀕していることもまた事実です。唐津市教育委員会においても、以上のような状況から、やむをえず保存できない文化財については事前の発掘調査をおこない、できるだけ正確な記録保存に努めると同時に、遺跡の保存・活用のための措置にも力を注いでいるところです。

本書は、唐津市浜玉町に所在する谷口石切丁場跡の重要遺跡の確認調査の概要報告です。当遺跡は以前より地元住民の方々に知られていた遺跡で、大坂城との関連も想定される非常に興味深い遺跡です。本書が、地域住民の皆様はもとより、市民各位の埋蔵文化財保護に対するご理解、さらには学術研究の分野においてもご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土遺物の整理に至るまで、地元作業員の方々をはじめ、多くの人々のご理解とご協力に対しまして、心から感謝の意を表するものであります。

平成 27 年 3 月 31 日

唐津市教育委員会 教育長 大塚 稔

例 言

- 1 本書は、国庫補助事業により、平成 22 年 4 月～ 26 年 3 月にかけて実施した谷口石切丁場跡の重要遺跡範囲確認調査の概要報告書である。
- 2 調査は佐賀県文化財課の指導を受け、唐津市教育委員会がこれにあたった。
- 3 調査及び本報告書作成にあたっては、佐賀県教育委員会にご協力を賜った。
- 4 製図は井上美代子、松尾あや子、宮崎良子、山中比抄恵があたり、執筆、編集は美浦雄二が担当した。

凡 例

- 1 Fig.1 は唐津市発行の 5 万分の 1 図「唐津市全図」を使用した。
- 2 Fig.2、5、8、9 は座標北、他は磁北を表す。
- 3 各遺跡の位置図、字図の縮尺は 1/10,000、1/1,000 であるが、適宜縮尺を変更した。
- 4 写真の縮尺は不統一である。

目 次

第 I 章 調査の経過	1	第 II 章 これまでの調査の概要	7
第 1 節 調査の経過	1	第 1 節 石材の分布について	7
第 2 節 地理的・歴史的環境	1	第 2 節 平成 25 年度調査の概要について	8
		第 III 章 まとめ	25

表 目 次

Tab. 1 唐津藩を中心とした年表	6	Tab. 2 石材観察表	20
--------------------	---	--------------	----

挿 図 目 次

Fig. 1 中近世主要遺跡分布図 (1/150,000)	3	Fig. 7 D 群石材分布図 (1/600)	16
Fig. 2 谷口石切丁場跡石材分布図 (1/5,000)	9	Fig. 8 C 群地形測量図 (1/600)	17
Fig. 3 A 群石材分布図 (1/1,000)	11	Fig. 9 D 群地形測量図 (1/500)	19
Fig. 4 B 群石材分布図 (1/600)	12	Fig. 10 A - 01 周辺オルソ画像 (1/80)	21
Fig. 5 A・B 群地形測量図 (1/800)	13	Fig. 11 A - 01 周辺遺構実測図 (1/80)	23
Fig. 6 C 群石材分布図 (1/1,000)	15	Fig. 12 大坂城及び再築にかかる主な 石切丁場跡	26

図 版 目 次

表 紙	A - 01
PL - 1	A 群 (A - 15、16 周辺) 近景
PL - 2	A 群 (A - 02 周辺) 近景
PL - 3	山添遺跡 (2 トレンチ)
PL - 4	中原遺跡 (7 トレンチ)
PL - 5	中原 (西ノ畑) 遺跡 (4 トレンチ)
PL - 6 - 1	黒田山遠景
- 2	A - 01
- 3	新たに発見した石材 (C - 18)
- 4	新たに発見した石材 (D - 15)
- 5	平成 25 年度調査地近景
- 6	トレンチ 3 近景
- 7	調査指導風景
- 8	作業風景

第1章 調査の経過

第1節 調査の経過

谷口石切丁場跡は、唐津市浜玉町谷口と潤上地区にまたがる通称“黒田山”に所在する。以前より地元では“太閤石”として知られており、1989年刊行の『浜玉町史』には写真付きで紹介されている。ただし漠然と肥前名護屋城のため石材では？と考えられていた。

平成17年度～20年度にかけて、谷口・潤上地区で西九州自動車道建設に伴う文化財の発掘調査が行なわれ、佐賀県史跡の仁田埴輪窯跡や中世の大型建物跡が確認された矢作遺跡など、多くの重要な遺跡が調査された。その調査の最中の平成19年度に、地元の方から“太閤石”に関する情報が寄せられ、調査担当者が現地を確認したことにより、遺跡の存在が注目されることとなった。その後は唐津市教育委員会が中心となり、多くの研究者の意見を参考にしながら平成20年11月6日に記者発表を行なった。その内容は再築大坂城に石垣石材を供給した最も遠方の石切丁場の可能性があることであり、近世の城郭史に与える影響が大きいということであった。これはマスコミでも大きく取り上げられ、11月16日の現地説明会では雨天にも関わらず約150名の参加者を得た。

平成22年度より国庫補助を受け、本格的な調査を開始した。平成22年度は分布調査を行ない、新たに山裾付近から2箇所の採石跡を確認した。また平成23年度より分布図や地形測量図の作成も行ない、石材が確認できた地点については現況を把握することができるようになった。さらに石材獲得技術を詳細に把握するために、平成25年度より確認調査も実施している。

第2節 地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

唐津市は佐賀県の北西部、九州島の北端に位置し、現在の市役所本庁で北緯33度27分、東経129度58分である。平成17、18年に唐津市、浜玉町、厳木町、相知町、北波多村、肥前町、鎮西町、呼子町、七山村が合併し現在の唐津市となった。

唐津市およびその周辺の地形は ①東松浦溶岩台地 ②松浦杵島丘陵 ③脊振山地西部 ④低地部(広義の唐津平野) ⑤島嶼域(東松浦半島沿岸部も含む)の五つに区分できる。①東松浦溶岩台地(通称上場台地)は東松浦半島の大半を占め、第三系や花崗岩類の基盤の上に第三紀末期に噴出した東松浦玄武岩類が覆う溶岩台地である。②松浦杵島丘陵は南北に流下する佐志川及びその延長線を境にした東側の丘陵性山地であり、松浦川西岸まで続く。その地質は第三系や花崗岩類からなり、標高約200m内外である。③脊振山地西部は地形が急峻であり、地質は風化の進んだ花崗岩類からなる。唐津平野の基盤の大部分もこの花崗岩類であり、不整合面を介して沖積層が堆積する。④低地部は①～③に囲まれ、北は唐津湾および玄界灘に接する平野を総称している。

谷口石切丁場跡が所在する黒田山は ③の脊振山地西部に含まれており、地盤は花崗岩類である。山中では最大10m程度の花崗岩転石が谷筋を中心に数多く確認できる。また玉島川は、現在では北流し唐津湾へ直接注ぎ込んでいるが、これは近世の河川改修によるもので、それ以前は現在の唐津市街地を流れる松浦川方面から大きく湾入していた干潟に注ぎ込んでいたと想定されている。

2. 歴史的環境 (Fig. 1)

唐津市域の遺跡の変遷について概観する。

旧石器時代の遺跡は中尾ニツ枝遺跡や枝去木山中遺跡など、上場台地に集中して見つっている。遺跡の密集度は北部九州でも屈指である。

縄文時代早期の遺跡も上場台地に多いものの、前期以降になると上場台地以外の地域でも遺跡の発見例が増加する。徳蔵谷遺跡や五反田松本遺跡は、唐津平野中東部を流れる佐志川流域と玉島川流域の拠点的な遺跡である。晩期には再び上場台地で遺跡の発見例が増加する。

弥生時代以降は唐津平野に遺跡が集中する。特に宇木川・半田川流域及び松浦川・徳須恵川流域に遺跡が集中している。代表的な遺跡として菜畑遺跡や中原遺跡、宇木汲田遺跡等牧挙にいとまがない。唐津市域の遺跡の特徴として、桜馬場遺跡や宇木汲田遺跡などを代表に、青銅器や玉類を副葬した墳墓が非常に多く見つっていることが挙げられる。

古墳時代も弥生時代と同様の遺跡の分布傾向が見られるが、新たに玉島川流域に古墳が築造されるようになる。また島嶼部では後期になると古墳の築造が盛んになる。唐津市域の古墳の特徴として、前期までは首長墓系譜をたどることができるが、中期以降古墳が小型化し、盟主墳が認められなくなることが挙げられる。

これまで古代の遺跡は発見例が少なかったが、徳須恵川と松浦川流域の千々賀古園遺跡や中原遺跡では、墨書土器や木簡などが大量に見つかり、官衙関連遺跡であることが明らかとなった。また市東部では古代以降、鉄生産に関連する遺跡の発見例が増加している。

中世以降の遺跡も近年調査例が増えてきている。特に佐志川流域では、徳蔵谷遺跡や佐志中通遺跡で館の可能性ある建物や道路跡が見つっている。この他大型の建物跡は市北部の塩鶴遺跡や市東部の矢作遺跡で見つかり、玄海町の長倉遺跡では大規模な石敷き遺構が見つっている。これまで中世山城は市南部を中心に数多く分布していることが知られていたが、調査例が少なく、詳細は不明なものがほとんどであった。しかし近年波多城跡や星賀城塞群、長部田城跡で調査が行われ、城域の構造が理解されるようになった。また獅子城跡や岸岳城跡では、中世山城が石垣造りの近世城郭に造り変えられていることが調査により明らかとなった。

近世における当地域最大の特徴は、市北部に名護屋城並びに陣跡が築かれたことである。全国の大名が布陣し、周辺の丘陵や浦々のほとんどが関係する遺跡という状態である。また近世初頭に朝鮮半島より製陶技術が取り入れられ、以降窯業生産が盛んとなったことも大きな特徴である。生産は市域の南部から伊万里市・武雄市域が中心であり、唐津焼として全国に流通していたことが知られている。近年玉島川流域では、今回報告する谷口石切丁場跡が再確認され、再築大坂城に石垣石材を供給したと推測されており、大きな注目を浴びている。また佐賀県文化財課による分布調査が精力的に行われており、中世山城及び文祿慶長の役に関連する陣跡は大きく増加している。

谷口石切丁場跡が所在する玉島川右岸の山麓は、市内でも遺跡が密集する地区の一つである。これまでは谷口古墳や測上古墳、鬼ヶ城跡が知られていたが、近年の調査により古墳時代中期の埴輪窯跡である仁田埴輪窯跡が発見された。当地域の遺跡の特徴としては、遠方の地域との関連を示す事象が多々見受けられることであろう。谷口古墳や仁田埴輪窯跡では、朝鮮半島や畿内地域との密接な関係がうかがえることがその好例である。これは当地域が筑前国と肥前国の国境付近に当たり、また水上交通と陸上交通の結節点であったため交通の要衝となっていたことの表れであろう。

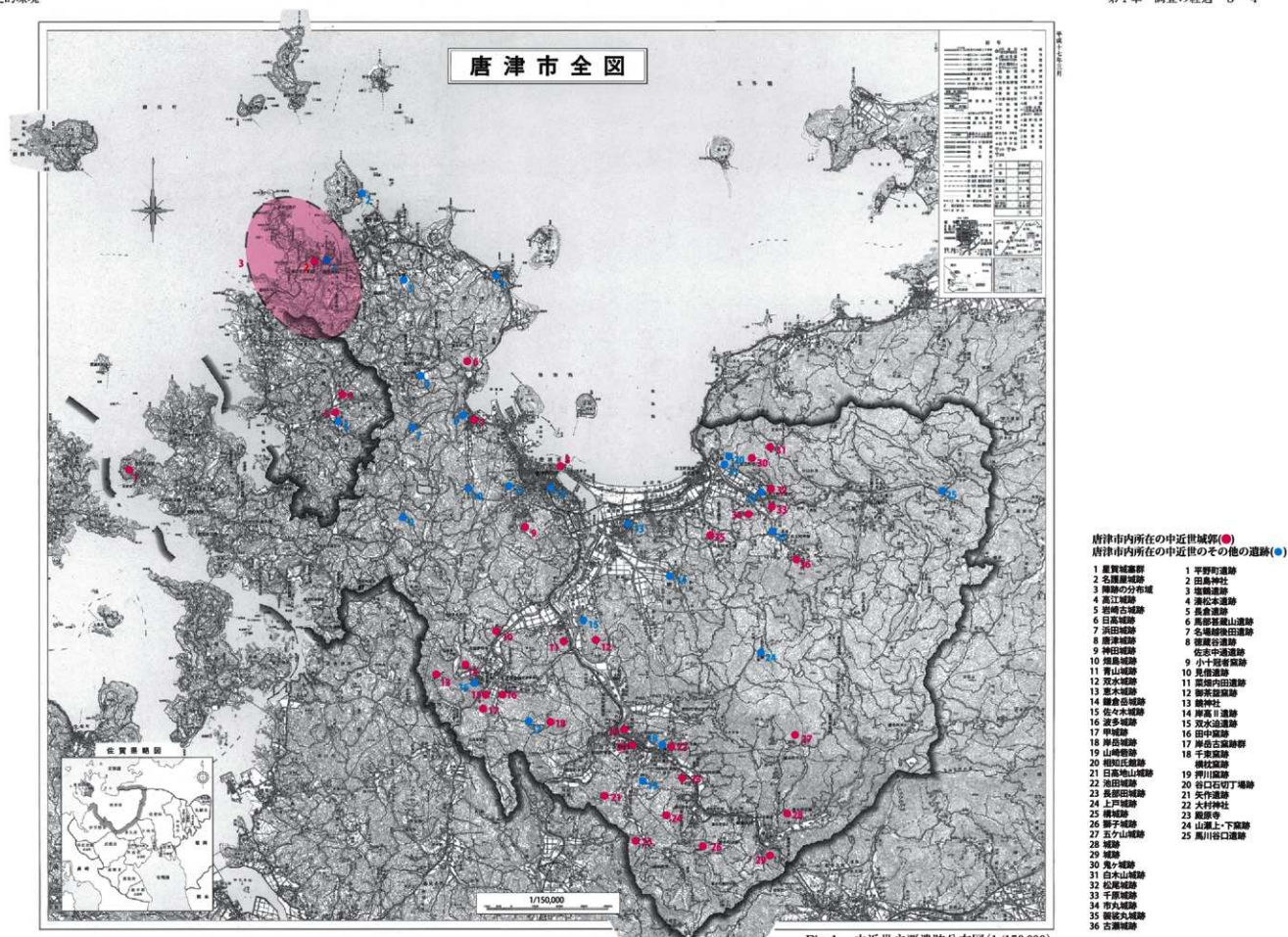


Fig.1 中近世主要遺跡分布図(1/150,000)

3. 近世初頭の唐津地域の歴史的展開 (Tab. 1)

前述のとおり近世の唐津地域は、近世初頭に名護屋城並びに陣跡が築かれていることが最大の特徴である。名護屋城並びに陣跡は、文禄慶長の役に際して朝鮮半島に出兵するための前線基地として築かれたものである。そこには全国から各大名が集まり、浦々や丘陵の地形を利用して大小様々な陣が築いている。そのため名護屋城周辺は人口が急増し、一時期は国内最大級の都市となっていた。文禄の役の間戦時、当地域の多くを支配していたのは中世以来の領主の波多氏であったが、役最中に改易されたため、豊臣氏の直轄を経て、その家臣であった寺沢志摩守広高が領主となった。寺沢氏は文禄慶長の役では、主に物資搬送担当として活躍していたが、役後は徳川家康との関係を深め、徳川氏から島津氏の内紛を納める役として派遣されるなど、強い信頼を得ていた。慶長五(1600)年の関ヶ原の戦いでは東軍に属し、その功により肥後国の天草郡も領地として加増された。

寺沢氏は領主として積極的に領内の開発に務めている。松浦川とその支流の河川改修や鏡及び和多田の新田開発を行ない、防風林として虹の松原の植栽も行なつたとされる。元和二(1616)年には領内の大規模な検地が行なわれており、公称12万3千石に対し実高は15万石余りであった。これは当時の大名としては小さくない規模であった。また城郭の整備も積極的に行なっており、定説では慶長七(1602)年から十三年にかけて唐津城を築城したとされる。しかし現在行われている唐津城の石垣積み替えに伴う発掘調査では、現在確認できる石垣の下層からさらに遡る時期の石垣が確認されている。これに関して山田洋氏により、唐津城は天正十九(1591)年に名護屋城の後詰として築城され、寺沢氏の入部以降増築や改築が行われた可能性が指摘されており(2007年)、調査内容と総合的である。

慶長十九～二十(1614～1615)年には大坂の陣により豊臣氏が滅んだ。寺沢氏は大坂の陣の後、徳川氏によって行われた再築大坂城の公儀普請に、元和六(1620)年の第一期工事から寛永七(1630)年の第三期工事まで全てに参加している。その他江戸城や尾張名古屋城の公儀普請にも参加している。この中で名古屋城の公儀普請では、唐津から石垣石材を運んでいることが知られている。

寛永二(1625)年寺沢広高は次男の堅高に家督を譲り、寛永十(1633)年に71歳で他界している。同年には、豊後岡藩の中川氏が唐津城下を秘密裏に探索している。なお隠密による探索は、幕府により寛永四(1627)年にも行われている。

その後、寛永十四(1637)年に領有していた天草でキリシタンを中心とした大規模な反乱が起きた。天草島原の乱である。反乱軍には島原半島の人々も合流し、島原半島の原城に立籠った。反乱軍は翌年幕府及び周辺大名による総攻撃で鎮圧されたが、乱後の始末として天草は没収され、石高は8万3千石となった。その後、正保四(1647)年に堅高は自害したが、堅高には継子がいなかったため寺沢氏は二代で改易される。

二年間の幕府直轄を経て、慶安二(1649)年に大久保氏が播磨明石藩より入封する。以降、松平氏-土井氏-水野氏-小笠原氏と五代の譜代大名が治めることとなり、幕末を迎えた。

	元号	西暦	国内の主な出来事	唐津の主な出来事
安土 桃山 時代	天正4	1576	織田信長による安土城築城開始	
	天正10	1582	本能寺の変	
	天正11	1583	豊臣秀吉による大坂城築城開始	
	天正19	1591	豊臣秀吉による名護屋城築城開始	
	#	#		唐津城築城説①
	文禄元	1592	文禄の役勃発	
	文禄3	1594		寺沢広高の唐津入部
	#	#		唐津城築城説②(慶長3年完成)
	文禄4	1595		唐津城築城説③(慶長7年完成) (唐津城築城説④文禄年間)
	慶長2	1597	慶長の役勃発	※唐津城修築説あり
	慶長3	1598	豊臣秀吉死去	
慶長5	1600	関が原の戦い		
慶長7	1602		唐津城築城説⑤(慶長13年完成)	
江 戸 時 代	慶長8	1603	徳川家康が江戸幕府を開く	富岡城(天草)完成
	慶長10	1605	徳川家康が秀忠に将軍職を譲る	
	慶長11	1606	江戸城の公儀普請開始(～1636)	
	慶長15	1610	名古屋城の公儀普請開始(～1614)	唐津からも石材が運ばれる
	慶長19	1614	大坂冬の陣	怡土郡(糸島)も領有
	慶長20	1615	大坂夏の陣により豊臣氏滅亡	
	#	#	一国一城令公布	獅子城、岸岳城をこのころ破却?
	#	#	武家諸法度(元和令)公布	
	元和2	1616	徳川家康死去	このころ和多田や鏡の新田開発完成
	#	#		本格的な検地を行なう(元和検知)
	元和6	1620	大坂城の公儀普請開始(第1期)	
	元和9	1623	徳川家光3代将軍就任	
	#	#	大坂城の公儀普請(第2期、～1624)	谷口石切丁場?
	寛永2	1625		寺沢広高、堅高に家督を譲る
	寛永4	1627		幕府唐津城下探索
	寛永5	1628	大坂城の公儀普請(第3期、～1629)	谷口石切丁場?
	寛永10	1633		寺沢広高死去。墓園の築造
	#	#		中川氏唐津城下探索(中川家文書)
	寛永12	1635	参勤交代の制度化(寛永令)	
寛永14	1637	天草島原の乱勃発(～1638)		
寛永18	1641	鎖国の完成(オランダ人を出島へ)		
正保元	1644		唐津湾沖に外国船来訪	
正保4	1647		寺沢堅高自害。寺沢氏改易	
慶安2	1649		大久保忠職唐津入部	

Tab.1 唐津藩を中心とした年表

第Ⅱ章 これまでの調査の概要

第1節 石材の分布について (Fig. 2)

唐津市教育委員会では、平成22年度より国庫補助を受け、通称“黒田山”（標高196m）及び周辺の山々の本格的な分布調査を行なっている。平成22年度は黒田山の踏査を行なった。当地は昭和30～40年代に果樹園の造成で切り開かれ農道が整備されているが、近年では全く手が入っておらず、荒れ果てた状態であった。そのため踏査は非常に困難な状況であった。今回の踏査により、山裾部で2箇所の採石跡が確認され、それぞれに1石の方形石材が発見された（註1）。翌年からは周辺の山々の踏査も行なったが、これまでのところ近現代の採石跡以外には確認できていない。

黒田山の山中で確認された石材は分布に基づき、まとまり毎にA～D群と名称を付け、それぞれの石材にA-01、02…と番号を付け、法量や特徴及び所在位置を記載し、写真を添付した石材台帳を作成した（Tab. 2）。Tab. 2はA-01石材の部分抜き出したものである。台帳には新たに判明した特徴等も順次追加している（註2）。

① A群 (Fig. 3)

山頂付近の石材群をA群とした。A群は太閤石として古くから知られていた石材群であり、当丁場跡の中心の石材群である。A群はいくつかの小グループに分けることができる。黒田山最高所のA-15、16（太閤石）を中心とした小群、A-01（母岩）を中心とした小群、北東側と南西側斜面に点在する端材の小群の計4小群が認められる。

A-15、16を中心とした小群は方形石材が3石あることが最も大きな特徴である。方形石材は石材毎に各辺の長さが微妙に異なり、規格の違いが想定される。また3石共に小口側に“□”型の刻印を有する。刻印はそれぞれ大きさが異なる。北東側斜面の小群（A-33等）は、石材の大きさが1m前後と比較的小さく、地籍境に列状に分布していることから、二次的に動かされている可能性も考えられる。ただしA群付近は重機による開発は受けていないため、大きな移動はしていないと思われる。南西側的小群には以前2石の方形石材が残存していたようだが、昭和40年代に運び出されている。A-01を中心とした小群は石材を切り出した母岩（種石）が残されていることが特徴である。A-01は幅が10mを超える巨岩であり、方形石材を数石切り出すことができる大きさが残っており、採石作業が途中で中断したことを推測できる。

② B群 (Fig. 4)

B群はA群から続く山腹に点在する石材群であるが、石曳き道の残存と地形的な特徴により設定した。B群の特徴は前述した石曳き道の存在である。現在50m程度確認でき、上幅8m、下幅は2m程度である。里道が横切っており、破壊を受けているが、後の時代に道として再利用された痕跡がなく、確認調査の必要性が高い部分である。石材の分布は石曳き道に沿って数石が確認されている。また標高120m付近には横穴式石室墳が1基新たに確認されており、これは市内最高所にある古墳である。Fig. 5はAB群を含む山頂付近の地形測量図である。山頂の平場は狭く、斜面の傾斜がかなり険しいことが理解される。

③ C群 (Fig. 6)

山裾の東側の一帯をC群とした。C群付近のしこ名は「イシバ」である。谷筋に帯状に石材が分布している（Fig. 8）。ただし地形の傾斜が著しく、谷部の埋積も進んでいることから現在目視で確認できない石材も多いと思われる。C-18は方形石材であり、全ての方形石材の中で最も表面調整が進んだも

ので、細かなスタレ状調整が施されており、凹凸が非常に少ない。C-24 はほとんどが埋没おり十分確認できないが、調整石の可能性はある。

④ D 群 (Fig. 7)

山裾の西側の一群を D 群とした。D 群は最も分布域が狭く、石材数も少ない。ただし果樹園造成の際の地形の改変を受けており、谷部の埋積も著しいため現在目視で確認できない石材も多いと思われる (Fig. 9)。方形石材 D-10 もほとんどが埋没している状態である。D 群の特徴は調整石 D-15 の存在である。上面中央に縦断方向に矢穴列があり、側面には掘りかけの矢穴列も確認できる。当丁場跡で確実な調整石はこの一石だけである。

第2節 平成25年度調査の概要について (Fig.10, 11)

平成25年度より、大型石材の獲得技術を詳細に把握するために、A 群の A-01 を中心とした小群の確認調査を実施している (註3)。調査に際しては、計測する石材が大型で立体物であること、接合関係を把握するのに有利なことから、平面実測に三次元計測を取り入れている。A-01～07 の石材に関しては、個別に画面上で回転や拡大して詳細に観察することが可能である。

A-01 の母岩から A-05 の方形石材まで直線的に並んでおり、回転させながら石材を獲得していたことが予想できることから、A-01 と 05 の周囲にトレンチを設定し、確認調査を実施した。トレンチ1では、A-04 は予想以上に大きな石材であり、トレンチ内で全体を把握することができなかった。しかし A-02 と形が近似することが分かった。またチップの出土量が少ないことから、作業の終了に際して、片付け行為が行われていた可能性がある。トレンチ2と3は A-05 の両小口側に設定した。A-05 は A 群の方形石材の中で唯一刻印が施されていないことから、作業工程が異なる可能性がある。トレンチ1と同じくチップの出土量は少ない。またトレンチ1と2からは鉄小片が数点出土している。

註1：黒田山は昭和49(1974)年に大規模な土砂災害が発生しており、山裾付近の土中には石材が埋没している可能性がある。また山裾付近の端材は利用しやすいため、後の時代に再利用されていたことも考えられる。

註2：石材に関する用語、台帳作成方法等は芦屋市教育委員会、兵庫県教育委員会の報告書及び森岡秀人氏の論考を参考にした。

註3：調査位置や調査方法については平成24年度に金沢城調査研究所の富田氏による調査指導を受けている。富田氏には石切丁場の調査に関する様々な指導助言を頂いている。

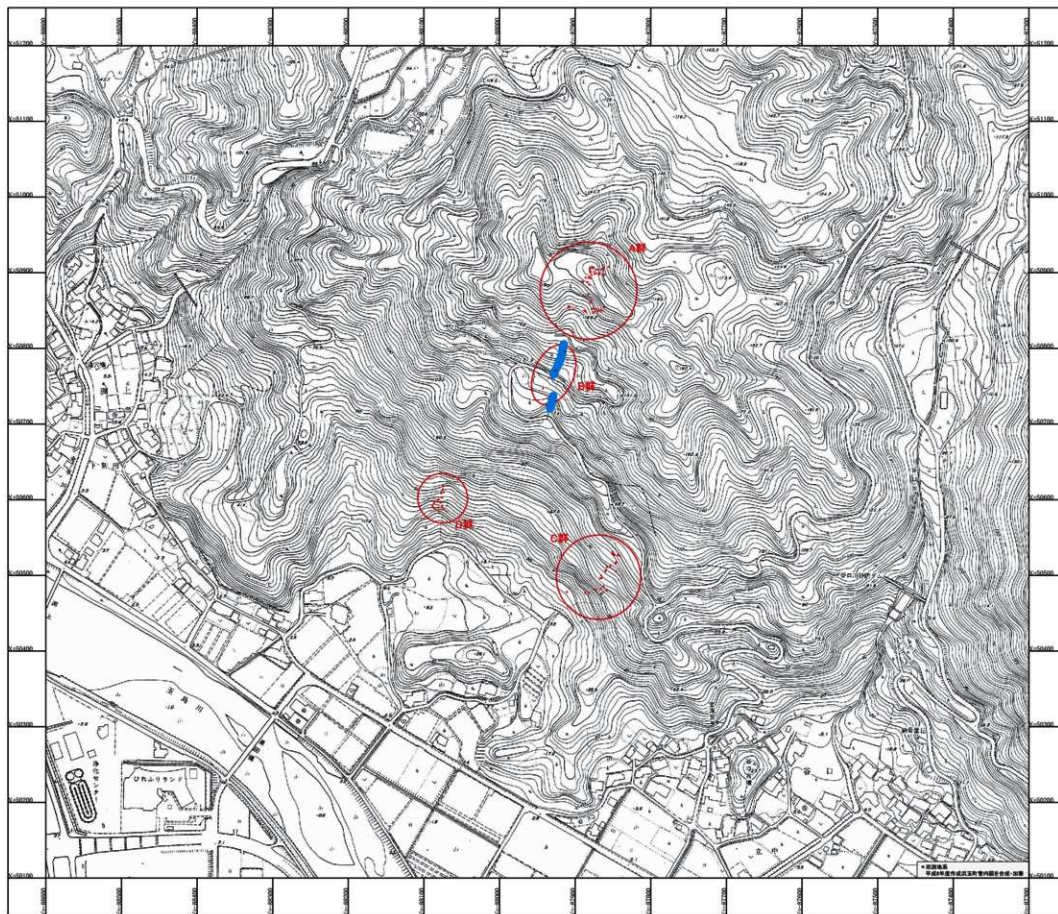


Fig.2 谷口石切丁場跡石材分布図 (1/5,000)

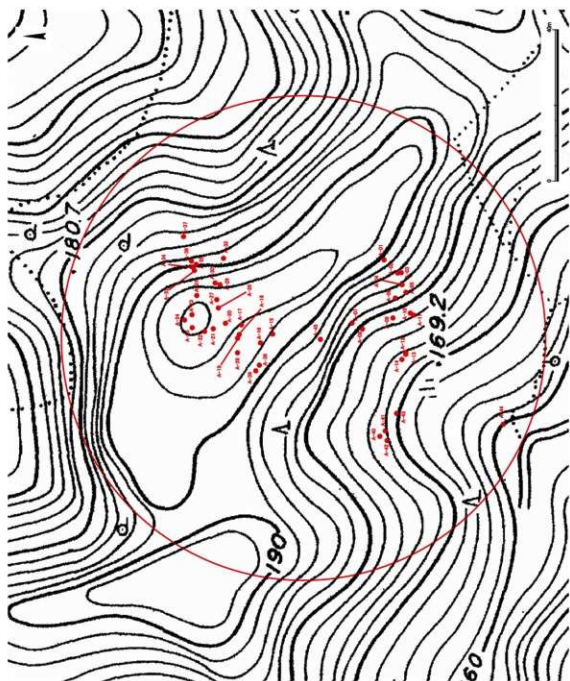


Fig.3 A群石材分布図 (1/1,000)

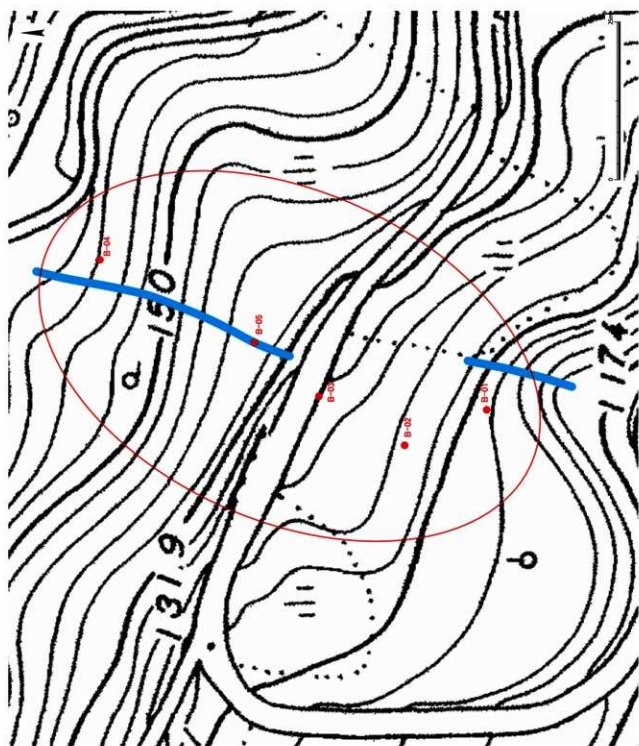


Fig. 4 B群石材分布図 (1/600)

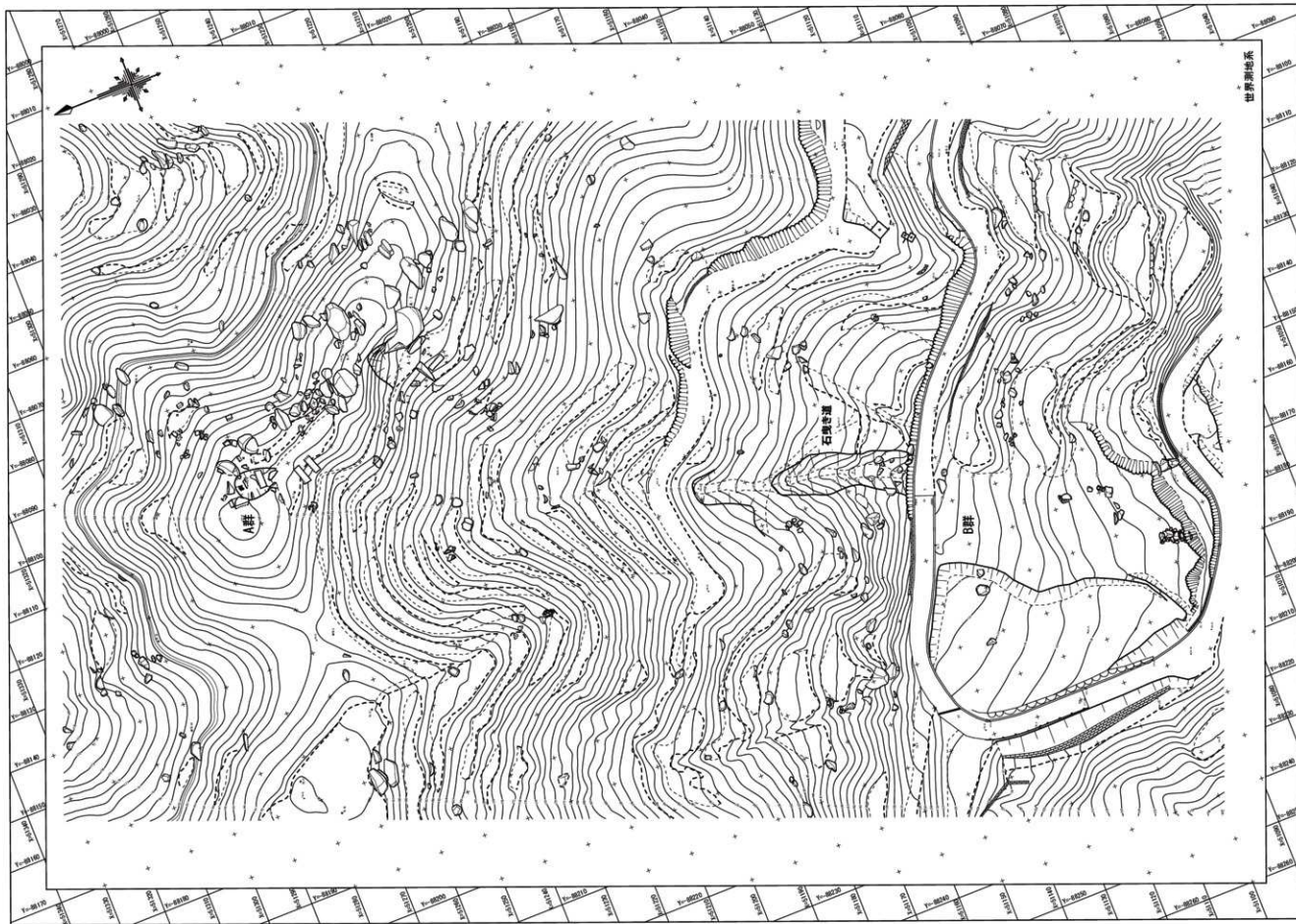


Fig.5 A・B群地形測量図 (1/800)

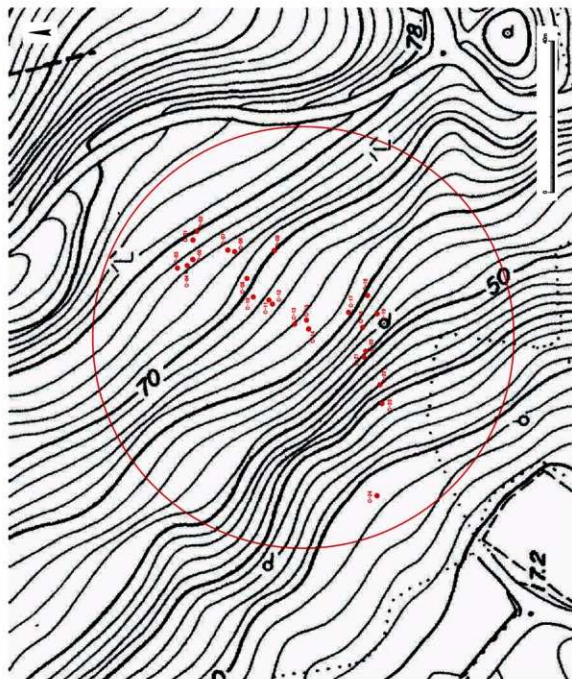


Fig.6 C群石材分布図 (1/1,000)

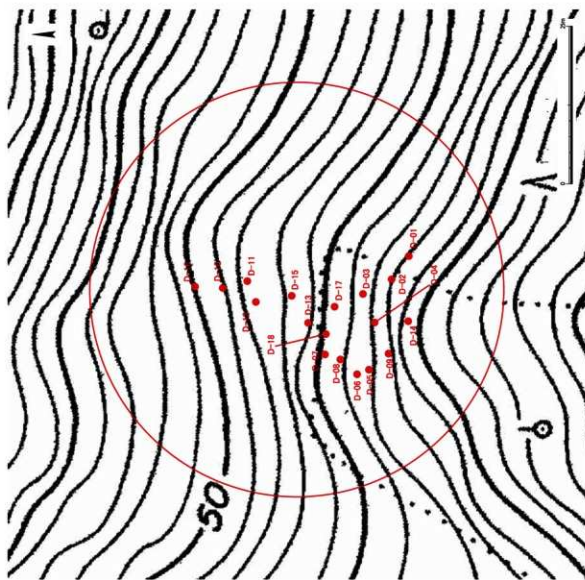
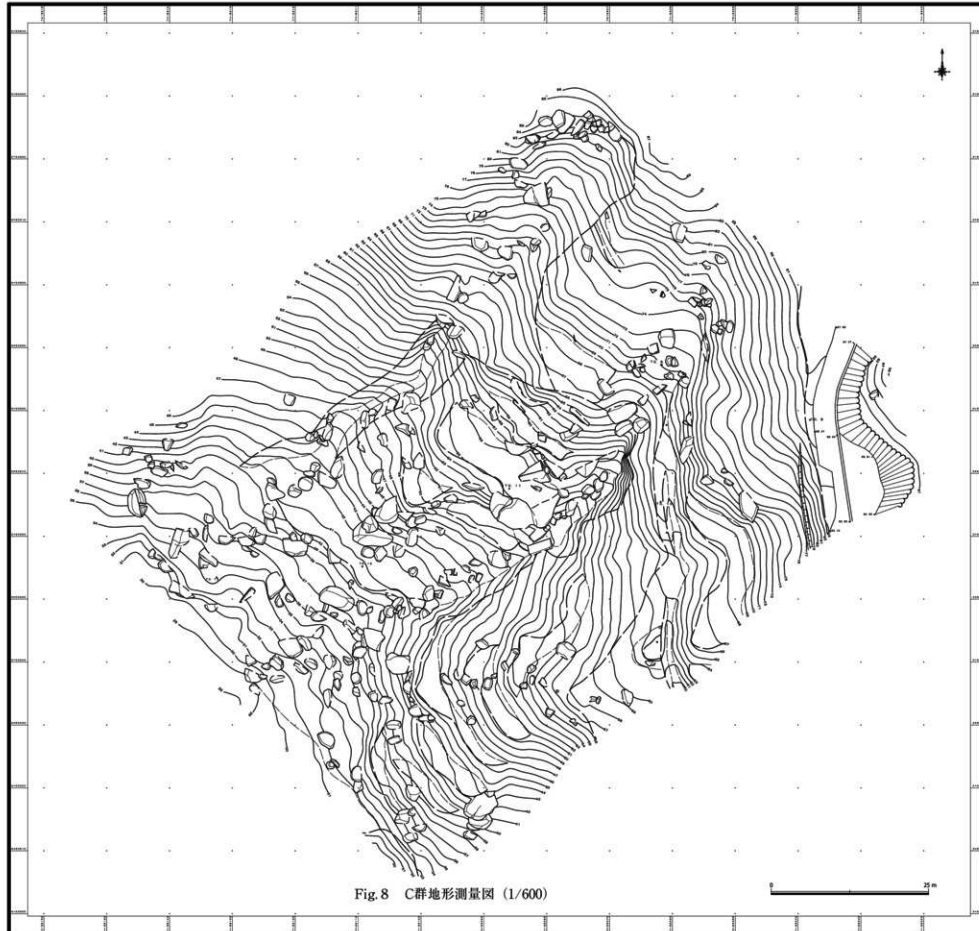


Fig. 7 D群石材分布図 (1/600)



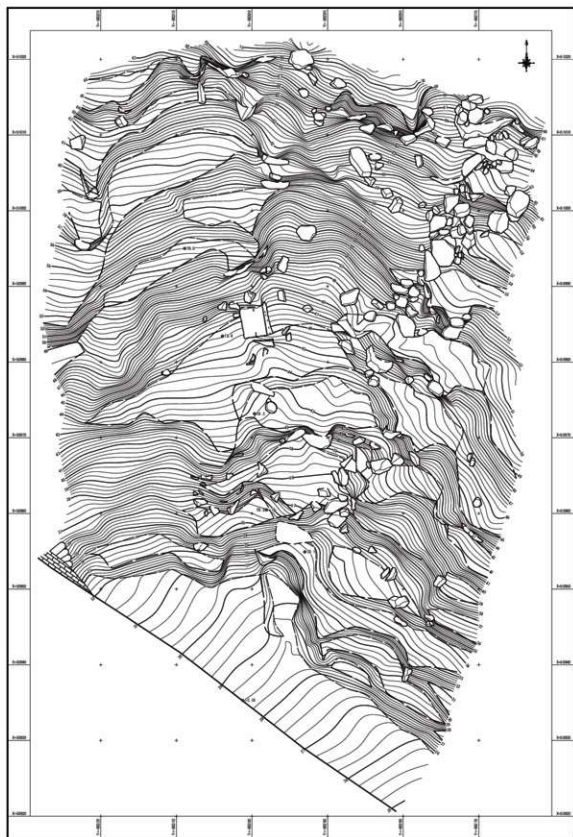


Fig.9 D群地形測量図(1/500)

石番号	A-01
-----	------

3D

ID番号	1
------	---

A	地区	GPS	緯度 33.272993999	経度 130.030887000
---	----	-----	-----------------	------------------

石材分類	母岩		
大きさ	長さ 1407+ cm	幅 923+ cm	厚さ 500+ cm
	矢穴 有り		
矢穴	矢穴の形式 Aタイプ		備考 <ul style="list-style-type: none"> ・他の石材と比べ矢穴の深さが深い。深いものは25cm以上。 ・ヤマトリあり。現状で幅20cm、深さ40cm程度。 ・A-2、6と接合関係にある。 ・表面付近に白色系の花崗岩(深江花崗岩)が貫入。
	矢穴幅 12.6 cm	矢穴深 22.5 cm	
	割付線 無し		
	調整痕 -		
その他	刻印 無し		



Tab.2 石材観察表



Fig.10 A-01 石材周辺オルソ画像 (1/80)

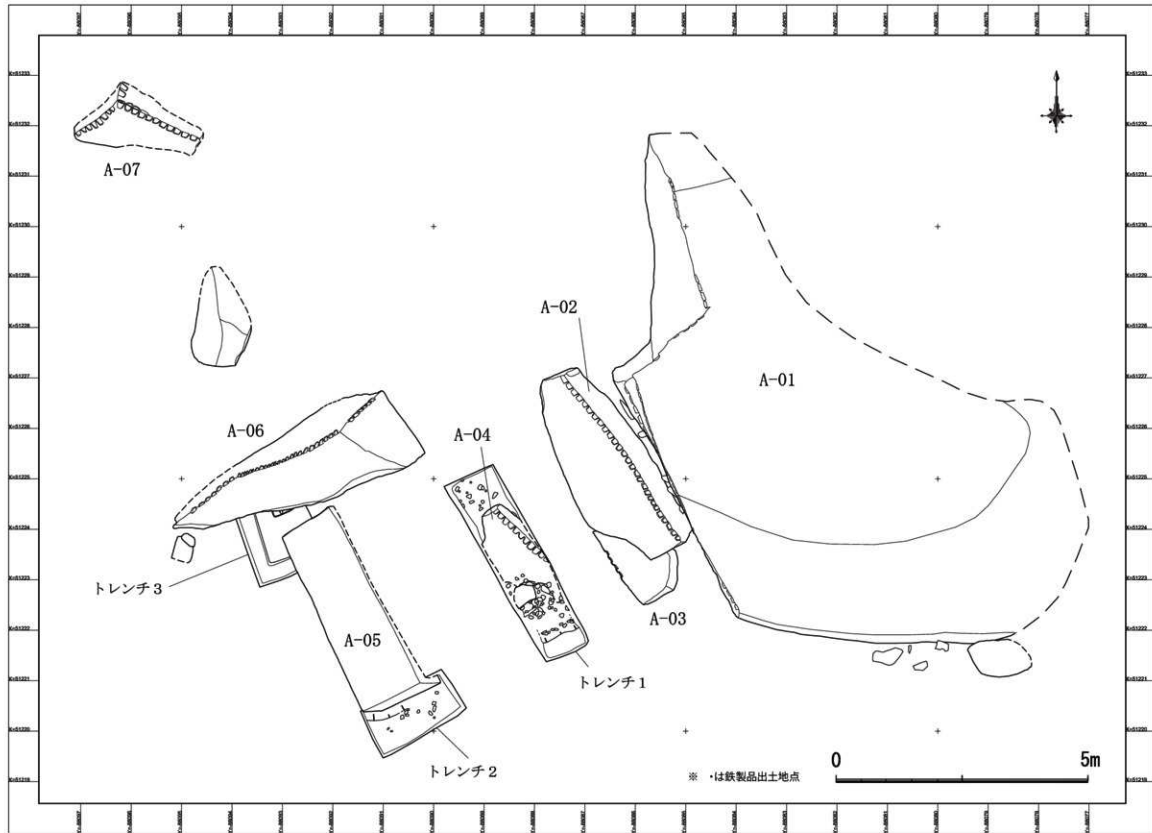


Fig.11 A-01 石材周辺遺構実測図 (1/80)

第Ⅲ章 まとめ

これまでの調査成果及び課題について現状でまとめを行なう。

(1) 現地調査について

- ・母岩から完成品までの工程が石切丁場跡に残されており、巨大な方形石材（角石）だけを切り出した特異な丁場跡であること。
- ・石材の大きさ及び加工技術より、再築大坂城に運んだ可能性が高く、その場合現在知られている中では最も遠い丁場となること。
- ・方形石材だけを狙っているため、丁場の規模自体は小さいこと。これは遠方の丁場の特徴の可能性もある。
- ・方形石材の加工の8～9割を現地で仕上げていること。運搬時の破損のリスクをどのように管理したのか。
- ・石切り作業時の割り損ないがほとんどないことから、作業は少数精鋭で行なったのではないが。ただし、唯一の失敗はD-15か。斜め方向にひびが入っている。また側方に入れかけの欠穴列も見られる。
- ・方形石材は6石確認。計測できる辺には同じ長さのものはなく、大きさを若干違えていることがわかる。これは整形時に大きさや形に関する細かい決まりがあり、それに基づいて厳密に作業が行われていたことを示す。
- ・A-15、16とC-18はほぼ完全に仕上がっているのに対し、A-20は片方の小口側がまだ整えられておらず、方形石材の中でも加工の度合いに若干の差がある。A-15、16は稜線部分を特に丁寧に調整し、反りをつけている。

(2) 文献について

- ・寺沢氏が二代で改易されているため、同時代の文献がほとんど残存しない。
- ・中川家文書が最も大きな手がかりである。そこには、「唐津城内の海に面した場所に、大きな割石が残されており、大坂城公儀普請の際の残石だと聞いた」ことが記されている。そのため、唐津から再築大坂城へ石材を搬出していたことは間違いない。ただし、それがどこの丁場から切り出した石材なのかは記されていない。もし谷口から切り出されたものが城内に運ばれていた場合、玉島川から直接大坂城へ運搬せずに、一旦城内で積み替えて運び出していたことになる。
- ・「鍋島勝茂公譜考補」には大坂城公儀普請の書状に浜崎の蔵番役目について記載されている。

(3) 伝承、その他

- ・唐津湾の高島沖で石船が転覆し、責任を取って武士が切腹したという伝承がある。
- ・黒田山よりも若干玉島川の上流側から石を積み込んでいたという伝承がある。
- ・昭和40～50年代に黒田山の山裾部の工事中に、地表下2m程度の場所から大型の木材が見つかっている。発見者は木造船の一部かと思ったと語っている。
- ・C地区のしこ名は「イシバ」である。
- ・現在のところ、大坂城内の石垣には寺沢氏が担当した箇所含めて、谷口石切丁場跡から切り出された方形石材が用いられた箇所は確認されていない。

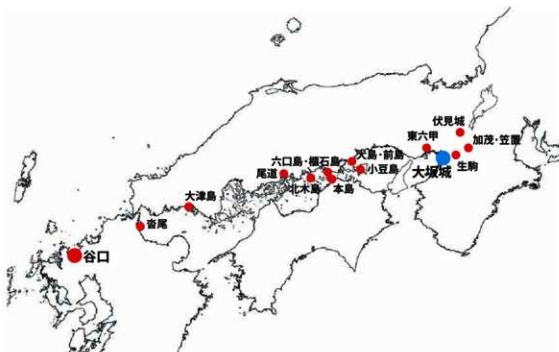


Fig.12 大坂城及び再築にかかる主な石切丁場

・地名が黒田山であることから、丁場跡が黒田氏(福岡藩)と関連があることも想定しておく必要がある。

なぜ大きなリスクがあるにも関わらず、これほどまでの仕上げ加工を現地で行ったのか？最初に感じた素朴な疑問はまだ解決にはいたっていない。また大坂城の石垣石材との比較検討は産地同定分析も含めて大きく進めなければならない。今後も調査を継続するので、課題の克服に努めたい。

調査指導をお願いしている富田氏や佐賀県立名護屋城博物館の市川氏、文献調査でご教示いただいている寺沢氏をはじめ、多くの方々より指導助言をいただいています。お名前を記して感謝申し上げます。

(敬称及び所属機関略。五十音順) 市川浩文、梅崎恵司、小山内康人、北垣聡一郎、栗木崇、杉山宏生、高瀬哲郎、田尻義士、寺沢光世、富田和気生、松尾信裕、三瓶裕司、森岡秀人

参考文献

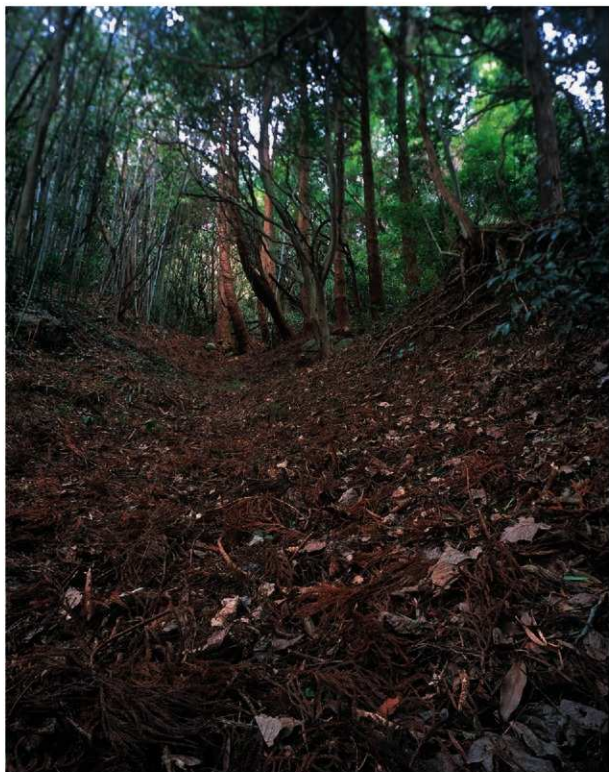
- 芦屋市教育委員会 2003 『岩ヶ平刻印群(第12次)発掘調査報告書』
 内田九州男 1982 「徳川大坂城再築工事の経過について」 岡本良一編『大坂城の諸研究』名著出版
 大阪歴史学会 2009 『大阪城再築と東六甲の石切丁場』ヒストリア別冊
 神戸大学文学部日本史研究室 1987 『中川家文書』臨川書店(神戸大学のアーカイブより確認)
 佐賀県立図書館 1994 『佐賀県近世史料』第1編第2巻
 兵庫県教育委員会文化財室 2008 『徳川大坂城東六甲採石場』兵庫県教育委員会



□ A群 (A-15, 16 周辺) 近景



□ A群 (A-01 周辺) 近景



① B群（石叟き道）近景



Ⅰ C群 (C-18周边) 近景



Ⅰ D群 (D-15周边) 近景



- ① 黒田山遠景
- ③ 新たに発見した石材 (C-18)
- ⑤ 平成 25 年度調査地近景
- ⑦ 調査指導風景

- ② A-01
- ④ 新たに発見した石材 (D-15)
- ⑥ トレンチ 3 近景
- ⑧ 作業風景

報 告 書 抄 録

ふりがな	たにぐちいしきりちょうばあとじゅうよういせきかくにんちょうさがいようほうこくしょ							
書名	谷口石切丁場跡重要遺跡確認調査概要報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	唐津市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第172集							
編著者名	美浦 雄二							
編集機関	唐津市教育委員会							
所在地	佐賀県唐津市南城内1番1号 大手口センタービル6階							
発行年月日	平成27年3月31日							
ふりがな 所蔵遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たにぐちいしきり 谷口石切 ちしやばあと 丁場跡	佐賀県 唐津市 浜玉町 たにぐち 谷口のりえ 谷口、湖上	41202	795	33° 27' 29"	130° 03' 08"	2012 ～ 継続中		重要遺跡 範囲確認 調査
所蔵遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
谷口石切 丁場跡	生産遺跡	近世		作業場		鉄片		再築大坂城に 石垣石材を搬 出した可能性 が考えられて いる

発掘現場から

文化力

POWER OF CULTURE

唐津市文化財調査報告書 第172集

谷口石切丁場跡

－重要遺跡確認調査概要報告書－

平成27年3月30日印刷

平成27年3月31日発行

編集・発行者 唐津市教育委員会
唐津市南城内1-1

印刷所 呼川プリント